



カトリック

三軒茶屋教会

おとずれ

2016年12月25日発行 第61巻 第8号



Merry Christmas

クリスマス号

しるし

主任司祭 ミカエル 湯澤 民夫 神父

クリスマスのみさに参加する信徒は、前晩のみさか、次の日のみさのどれかに参加するから、あまり気にならないかもしれないが、クリスマスのみさには、前晩（夜半）、早朝、日中の三種類がある。クリスマス以外でも、大きな祭日の場合、当日のみさの他に、前晩のみさがあることがある。

みさが異なると、当然、朗読される聖書の箇所が異なる。クリスマスのみさで読まれる福音について言えば、『ルカによる福音』のイエス・キリストの誕生の物語が、前晩と早朝で二つに分けられている。つまり、前晩のみさでは、天使による羊飼いへのお告げの場面が読まれ、早朝のみさでは、羊飼いによる幼子発見の場面が読まれる。だから、前晩のみさにだけ出て、早朝のみさに出ないと、幼子を発見しないで済んでしまうのである。日中のみさは、『ヨハネによる福音』の冒頭のロゴス賛歌が朗読される。

ところで、男の子が誕生したはいいが、どこなのか、探し出すのは大変である。ルカでは、天使が、「布にくるまれて、飼い葉桶に寝かせられている」のが、目印だと告げる。普通なら、そのようなことは起こり得ないから、目印になったのであろう。探し当てたのか、ダメだったのか、当然気になるが、ここで、前晩のみさは終わる。探し当てられました、というのが早朝のみさである。他方、マタイの方は、御公現に読まれるが、博士たちが、星を目印にやってくる。しかし、頼りの星が消える。そこで、聖書を頼りに調べると、ベトレヘムだと分かる。そこへ向かうともう一度星が現れ、その家で止まる。自然のしるし、星だけでは、キリストに行き着けず、聖書の助けがどうしても必要だ、とマタイは言うのである。

ルカでは、ヨセフとマリアは、ナザレから来た旅人であるから、用事が済んだら故郷、実家へ帰ってしまう。だから、羊飼いは、「今、すぐに行こう」というのである。マタイの方は、ヨセフとマリアは、ベトレヘムの自分たちの家に住んでいるから、急ぐ必要はない。博士たちが、ヘロデの王宮に立ち寄らないで帰った後で、ヘロデが三歳以下の子供たちを殺したことを考えると、イエス様が生まれてからかなりの時間が経っていたと推測できる。

古代の羊飼いたちや博士たちは、飼い葉桶や星、そして聖書を手掛かりにして、イエス様に到達した。現代の私たちにも、自然現象、聖書、日常の出来事、更に、神様の言葉としてのイエス様など、たくさんのしるしが用意されている。さあ、どのしるしを用いてイエス様に到達するのか。それは、私たちにまかせられている。羊飼いたちや博士たちのように、イエス様に辿り着けたとしたら、その時は、本当のクリスマスになるのかもしれないね。そしてその時は、完全な賛美と感謝を捧げられるのかもしれない。

待降節黙想会

信仰養成委員会

11月27日(日)待降節第一主日、フランシスコ会清永俊一神父様のご指導下、「神に向かう私 私とは何者か？」と題し、黙想会が行われました。清永神父様より、当日の講和の要点を頂戴いたしましたので、おとずれ紙面を通じ、ご報告とさせていただきます。

【カトリック三軒茶屋教会 待降節黙想会(2016.11.27)要点】

第一講話

- キリスト教の神とは、どのような神であるのか。また神を礼拝する私とは、いかなる人間であるのか。
- ありのままの自分を認め、受け入れること。自分が自分であることを神に感謝できるようになること。それがキリスト教で言う「回心」。ありのままの自分を前向きに受け入れることは、誰にとっても難しいこと。
- ありのままの自分を自覚し、感謝できるようになると、自分の周りの人々に対しても、その人たちがありのままのその人たちであることを、認め、受け入れることができるようになる。
- ありのままの自分は、世界の中で、ここにいる自分しかいません。自分というたった一人の人間。その意味で私たちは孤独です。
- この孤独の意味は、ここにいる私が、現実の生活を生きている私だ、この私以外に私はいない、という自覚です。人間関係を構築していく際に、この孤独を自覚することは重要です。
- 孤独は、決して寂しいものではない。旧約聖書の創世記に、人間は神にかたどって(似せて)創造された、と書かれています。私たち一人ひとは、どこか神に似ています。神の面影を宿しながら、神ご自身に向かって生きている私たち。
- 自分が自分であることを受入れ、かつ喜び、安定していることは重要です。その人の前では、他の人も自らを受入れ、そのことに安定することができます。
- 自分を受け入れていない人は、他の人がその人自身であるという現実を受け入れることができない。
- この場合は、現実から離れて、空想の世界、現実とは違う世界の中で生きる ことになります。こうなると他の人との真の意味での出会いもあり得ないし、真の対話も成立しません。
- さらに、神に向かう場合、自分を受け入れていない人は、自分自身を受け入れていない程度に応じて、自分にとって「都合の良い神」を想定することになり、結果として「真の神」に出会うこともできなくなる。
- 自分自身と他の人を見つめる眼差しが、その同じ眼差しが神にも向かう、と いうことです。イエスは、ありのままの現実の世界の中で、誕生し、生き、十字架に架けられた、と言えるでしょう。ありのままの現実を直視し、肯定的に受取り、感謝することが大切です。自分を偽っている人は、偽っている限り、神は理解されず、されたとしても、偽りの神(自分の作り上げた神)となってしまいます。

- キリスト教はレアリズムである、と言われる。キリストは、現実の世界の中で生まれ、生き、十字架にかかった。私たちも、現実の世界を通して救われていきます。
- イエスの場合は：御父に従順であり、御父のみ旨に全幅の信頼を置いていたイエス。御父から与えられた使命を果たすことを何よりの喜びとしていたイエス。自分のすべてを感謝して受け入れていたイエス。御父の前でありのままにたたずんでいたイエス。
- イエスに出会った人は、イエスを通して、ありのままのその人自身を見出すことができ、そしてそのことによって自らの罪深さに気づき、神に向かう回心への招きを感じ取ったのではないのでしょうか。
- 「自分の貧しさを知る人は幸いである」(マタイ福音書5章3節)。「心の貧しい人々は幸いである」とも訳されている。直訳では「霊において貧しい人 (the poor in spirit)」。人を幸福にするものは、自分の力で手に入れられるこの世の富ではなく、祈りによって神から与えられる恵みだけである。貧しさとは、所有の世界から自由になること。神は何も所有しない。何かを所有することによって、神が神であるのではない。神は存在そのものであり、所有の秩序の中にはいない。物を所有することによって人生を成り立たせようとするのは人間であり、そういう人間とは、根本的に違う。絶対的な存在である神に向かう際に、物の所有は何の役にも立たない。むしろ妨げとなる。私たちは、神に向かうために、まさにそのために、所有から離れていく。逆に物にしがみつくことで心を乱し、それを手放す際には深い悲しみを体験する。
- もちろん、ある程度のものは人間が生きていく上で必要。何もなければ生きていくことはできないし、何もできない。しかし、所有によっては、神に近づくことはできない。しかし、存在そのものである(すなわち「絶対的に貧しい」)神に向かう人にとって、貧しさを生きることは必要なこと。それに応じて神に似ていく人間。「神に似せて人間は創造された」(創世記)。

第二講話

- 私たちが向かう「父なる神」について。
- マザーテレサの体験した「孤独」について。マザーテレサは深い孤独を体験した。
- 神は、存在そのものであり、絶対的。神に限界はなく、全能でおられる。しかし人間は物によって、またそれを所有することによって自分を成り立たせている。そして時間という制限の中で生きている。人間の幸福は、それらによって左右される。
- イエスは、祈るときには「父よ」と言いなさい、と弟子たちに教えた。主の祈りの「私たちの父よ」の呼びかけ。イエスに促されて、イエスの「アッバ、父」である方に向かって、私たちも「父よ」と呼びかける。
- イエスは、弟子たちの祈りに大いに心を配っていた。彼は、弟子たちがイエスの父に向かって大いに祈るようと、それも絶え間なく祈るようと、そして彼らの祈りが真実のものであるようにと望んでいた。
- イエスの祈りの独創性は、この呼びかけ「父よ」の中に含まれている。彼は父に向かうとき、この信頼と親しさに満ちた名前と呼ぶ。「アッバ、父よ」と。
- 「神の栄光、それは生きるようになった人間である」(イレネウス)。「The Glory of God is the human person come alive.」 生きるようになった人間とは、神のいのちに生きるようになった人間、イエスの御父を「父よ」と心から呼ぶことのできるいのちの關係に生きるようになった人間のこと。そのような人間のみが、神を喜ばせることができる。

- 神の栄光は、外から何かを付け加えることは本来的にあり得ず、完全な栄光そのものであるが、唯一、神の国を目指す人間によってのみ、神の栄光は、いや増していく。人間にとって、これほど偉大なことはあり得ない。神の光輝きが、さらに増していくとは、何ということであろうか。
- 「父よ」と呼びかけながら、御父の愛に、自分を任し委ねること。御父によって生かされるままになること。そしてこの愛によって生きることを楽しむこと。それは、真の礼拝であり、正しい賛美である。
- 弟子たちにとって、御父の益になることが自分たちの益となり、御父が御父として知られるように、その計画が実現するように、そしてその計画が天におけるように地でも支配されるようにと願う。
- 神は、私たちが神のために祈り、その御名の啓示のために祈り、その御国の到来のために祈ることを許し、また、望んでさえおられる。神はそれを御子に委ね、そして弟子たちに委ねる。深く愛する者は、誰でも謙遜である。御父は、自分が愛する者のために生き、愛する者によって生きるのが嬉しいのである。御父は、自分の御子とその子たちが、自分とすべてを分かち合うことを望んでいる。
- 主の祈りの中で「御名が崇められますように、御国が来ますように」と祈る。この表現は、懇願の切実さと尊敬に溢れた切実さを表している。望みの対象は、人々がみ名を聖とするというのではなく、また、人々が御国に従うというのではない。すべてのイニシアチブは神に帰する。したがって、神が自分の名が聖とされるようにしますように、そして自分の国が来るようにしますように、ということである。神がそのようにしてくれますように、ということ。なぜなら神を除いては、誰もそれをするにはできないから。
- 神が、この世に御国の場を造るのは、キリストにおいてである。御国は、救い主キリストを通して、人々が自分自身も神の子となりながら、「その愛する御子の支配下に」入ることを受け入れる度合いに応じて、人々の上に広がっていく。神の栄光とは、御父がキリストの父であり、そして我々の父でもあることが明らかになっていくことにある。

巡礼点描

協力司祭 ヨセフ 小西 広志 神父

10月の末からおよそ十日間、聖地に巡礼に行きました。そこで見聞きしたこと、感じたことをお話しします。

ことばが生きている！

モスクワからテルアビブへ向かう機内、乗客のほとんどがユダヤ人の家族連れでした。10月はユダヤ教にとってはお祭りのシーズン。海外在住のユダヤ教徒がエルサレムを目指すのでしょうか。通路を挟んで隣に座っていたのも小さな子どもを連れた家族連れ。デップリと太ったお父さんがなんとも優しい眼差しで子どもたちの世話を焼いています。その子どもたちと隣り合わせたわたしたちのグループの方が後で話してくれました。「『アッパ』って子どもがお父さんと呼んでいた、聖書のことばは今も生きているんですね」。確かに、巡礼の期間中に耳にしたヘブライ語の中には、わたしの数少ないヘブライ語の知識と一致するようなことばがありました。聖書の中のことばが今も生きているのだと実感しました。

ここにイエスさまがいた？

少し二日酔いの頭を抱えながら、宿舎を抜け出して、湖の夜明けを眺めました。対岸の町の灯りがチラチラと輝いています。湖面には豆粒ほどの光が見えます。小さな舟で漁をしているのでしょうか。そうです。ここはガリラヤ湖。イエスさまと弟子たちが出会い、イエスさまがお話しなさったところ。二千年の時間を越えてこの地に居合わせたことここから感謝しました。「神父さん、ここにイエスさまが立ってたんですね」、「ここでイエスさまがお話しになったんですね」と旅行の期間中何度も参加者から確認のような問いかけをいただきました。その度に「ここにイエスさまがいらしたという歴史的な確証は何もありませんよ」と夢も希望もない答えをしていました。まったく、神学を学んだ神父は人の心に寄り添うという配慮がない。「でも、二千年の間多くの人々が、そして今、わたしたちも、この場所にイエスさまがいらしたと信じ続けています。この信じるころの方がどれほど尊いでしょうか」といつも付け加えていました。イエスの時代とあまり変わらない風景に自分が居合わせることの喜びのほうが、歴史の事実よりも大切なのだと思いました。

青年たち

「絶対、後ろを振り向かないで」。皆さんに厳しく言いました。フィリポ・カイザリアでのことです。井之上神父様が朗読してくださる聖書の一節に耳を傾け、静かに黙想の時間を皆で取っていると、崖の上の方からユダヤ教徒の若者たちがわたしたちをはやし立てていました。黒ずくめの服装から正統派のユダヤ教徒であることがわかります。巡礼に寄り添ってくださったガイドの方に伺ったら、最近ではレイシスト（差別主義者）のユダヤ人が増えているとのこと。しかも、そのほとんどが10代後半の若者だそうです。「律法に対して盲従し、非ユダヤ人に厳しく接する」ことが彼らのアイデンティティになっているそうです。

事実、「五つのパンと二匹の魚」教会の中庭も、若者たちのいたずらで放火されたのはわたしたちが訪れる数日前のことでした。

イスラエルの町には若者がたくさんいました。この国は若い国なのです。ユダヤ人、パレスチナ人などなど。でも、互いに無関係。ベトレヘム、エリコなどのパレスチナ自治区では仕事がないのでしょうか、青年たちの中には無為に過ごしているかのような者もいました。エルサレム旧市内の若者たちは、服装も洗練され、何の心配もなく青春を謳歌しているかのようでした。伝統的なユダヤ教の装束を身に着けて、徒党を組んで歩く若者たちの未来はどんなものだろうと、少し思い巡らしました。

花嫁

西エルサレムの郊外のエン・カレムを訪れました。マリアさまのご訪問の教会へと向かって坂道を登っていく途中、マリアの泉と呼ばれるところで美しい花嫁さんと偶然出会ったのです。端正な顔つきをした親戚のお姉さま方がに付き添われて初々しく、美しい花嫁さんは、今まさに婚礼の場所に到着したところでした。説明を受けたわたしたち一行は拍手で祝福。花嫁さんは顔をほころばせています。聞けば、夕方にやってくる花婿を待っているとのこと。まるで福音の物語とそっくりです。ご訪問の教会でミサをして、同じ道をユックリと下ってくると、同じ場所に花嫁さんがたたずんでいた。谷を見下ろせる場所に座って、夕陽に向かって、小さな祈りの本を大切に持って、一心に祈っていた。美しい光景でした。

荒れ地

死海は荒れ地でした。わたしは早くここから脱出したかったです。あまりにも自然が厳しい。人間の無力さを体験させられる場所、神と相對することを無理やりさせられる場所のようです。「でも、二月頃になるとこの荒れ地に小さな花が咲くんですよ」。現地の方のことばが響きました。帰りの機内で考えました。荒れ地とは神との出会いの場であり、ゆるしの場なのではないかと。神にしか頼ることのできない荒れ地で、人は「生きていていいんだよ」という神のゆるしのことばをいただくのでしょうか。「ご覧よ、空の鳥、野の白百合を」のことばがよみがえってきました。いつか、荒れ地の一面に咲く小さな花を見たいものです。



ヨルダン川の畔にて



ゴルゴダの教会前にてイスラエル巡礼団

イスラエル巡礼の旅 感想

フランシスコ・ザビエル 齋藤 登

この度イエス様の足跡を網羅した聖地イスラエル巡礼の旅に小西広志神父様、井之上強神父様御引率のもと参加しましたので、感想の一端を記します。

旅と言うものは紅葉狩りに行っても、誰と一緒にいくか、どの様な気持ちで行くか、旅の段取りや準備はどうか、によって、もみじの色の輝きが違って見えると思うのです。今回の旅は、私の期待を大きく上回るものでした。

その段取りについて、これは私にとってサプライズでしたが、10日間毎朝小西神父様が参加者30名一人一人に「今日はこの言葉を心に刻み一日過ごしましょう。」と云われ日替わりのカードを手渡されたのです。カードにはその日のスローガンと旅の行程が記されています。

例えば、

***初日『行こう』**：主の家に行こうと言われたとき私は喜んだ。詩編122,1

⇒成田発、モスクワ経由、テルアビブへ

以下《》内は私のコメント、⇒は当日の訪問先です。

***三日目『幸いである』**：自分の貧しさを知る人は幸いである。マタイ5,3

⇒ガリラヤ湖、山上の垂訓教会、カイザリア

《イエスが群衆に語りかけた山上の垂訓の丘に行く日程ですから、「幸いである」がピッタリでした。しかもローマ法王も滞在された教会のゲストハウスに3日間も私達が滞在できたのですから、また移動のバスの車中で、ガリラヤ湖を眺めながら「ガリラヤの風かおる丘で」を合唱したのも本当に『幸せでした』》

***四日目『喜びなさい』**：恵まれた方よ。主はあなたと共におられます。ルカ1,28

⇒ナザレ受胎告知教会、カナの婚礼教会

《お目出度いマリヤの教会や、水がワインに変わった教会へ行く日ですから、参加者全員がスローガン通り「喜ぶ」のは当然でした。夜は美味しいイスラエルワインで乾杯しました。》

***八日目『泣く』**：鶏も鳴いたら、ペトロも泣いたカトリックかるたから。

⇒十字架の道行き、最後の晩餐、鶏鳴教会

《ヴィア・ドロローサで実際に十字架を担いだ井之上神父様の感涙の表情に私達も感動しました。》

これらのカードを毎朝受け取ることにより、この旅が普通の旅行では無く「巡礼の旅である」というスイッチが私の時差ボケの頭に入力されたのです。

段取りの二番目は、機中を除いて毎日、小西神父様、井之上神父様のミサに与りましたが、ミサの場所はすべて歴史的に著名な教会でした。世界中から巡礼者がラッシュしていましたが、私たちは定刻に、少なくとも30分間は教会がリザーブされているなか、静かにごミサに与ることが出来たのです。イスラエルはフランシスコ管区発祥の地

でもありますが、優れて小西神父様の根回し、段取りによるものと一同感謝しました。地元の神父様やシスターの歓迎を受けたことも感激しました。最後に私にとって目から鱗が落ち、納得した事がありました。私達は連日イエスの足跡を辿り、ベツレヘムではイエス聖誕の場所の石を拝み、宣教した垂訓の丘に立ち、エルサレムでは処刑されたゴルゴタの丘でイエスの聖骸に香油を塗った場所の岩に手を触れる、と言う行動を取ったのです。しかし遠藤周作の「死海のほとり」に記されているように、「考古学的に言えばエルサレムはイエスの死後、幾度も破壊され、再建された。ローマ軍が壊し、十字軍やイスラム軍が砕き、廃墟になった街の上に新しい街を作った。次々と崩した街の上に街を作り、イエスの跡はこの城壁の中には殆ど存在していない。皆が訪れている場所は巡礼者用の設え（しつらえ）である。」と括弧しています。小西神父様は私との会話でこのように仰いました。「それぞれ言い伝えられている場所で2000年もの間、多くの信者が祈ってきたその事実を尊ぶことに意義がある。そして、それらの人々の行動に思いを馳せイエスを偲んで祈ればよい。」と。確かに考古学的見地から史跡を見れば矛盾に突き当たる事になりますが、神父様のいわゆる思考行動を取ることにより、史跡巡りが一層感動的なものになると確信しました。その様ななかで、私は：イエスが確実に見たガリラヤ湖を眺め、洗礼を受けたヨルダン川の水に手を浸し、「山上の垂訓」の丘では深呼吸をしてイエスの「気」を感じとり、この上なく満足でした。今回の巡礼のお蔭で、私も少し聖書の味わい方が理解できるようになった気持ちがします。(完)



山上の垂訓教会



ゴルゴタの丘で井之上神父



小西神父様・井之上神父様と参加した教会メンバー



マリアの訪問教会前の集合写真

「ピザの日」に教会でピザーパーティー開催

去る11月20日(日)10時30分のミサ後に、ピザーパーティーを、ボーイスカウト／カブスカウト・日曜学校・中高生会の皆様と共同で開催致しました。本年はピザーパーティーに相応しい天候に恵まれ、暖かい日差しの中、60名以上の方々にピザを楽しんで頂くことができました。また会の最後には、井之上神父様のギター伴奏で子供達と合唱を行い、ボーイスカウト／カブスカウトの皆様とも交流を深め楽しい雰囲気でのピザーパーティーが行われました。

朝8時から約3時間ピザ窯に火入れをして下さったボーイスカウトの皆様、合唱をリードして下さいました井之上神父様や中高生リーダー&楽隊の皆様をはじめ、ご協力頂きました関係者の皆様にこの場をかりて厚く御礼申し上げます。(教会委員 茂木)



園庭のピザ窯



井之上神父様のギター伴奏



ピザパーティーで楽しんだ皆様

2016年10月度 教会委員会

日時：2016年10月6日（日）9：25～10：25

出席：湯沢神父、教会委員（小野、鈴木三、小林、茂木）、典礼（安永芳）、信仰養成（洗川）、
受付（津田）、當繕（安永三）、広報（大坪）、財務（北村）

1. 2016年9月～2016年11月の行事（予定）

| | | |
|----|-----------------|---------------------------|
| 1 | 敬老の日お祝い | 9月18日（日） |
| 2 | 典礼研修会 | 9月25日（日）9:30- 指導：宮越氏 |
| 3 | バザー会議② | 9月25日（日）13:15頃からを予定。 |
| 4 | (幼)運動会 | 10月 1日（土）雨天順延→中止（10/3に実施） |
| 5 | 赤い羽根共同募金 | 10月 2日（日）三軒茶屋駅周辺で行う |
| 6 | 教区こどものミサ | 10月 9日（日）14:30-@カテドラル |
| 7 | バザー会議③ | 10月 9日（日） |
| 8 | バザー | 10月23日（日） |
| 9 | 大掃除 | 10月30日（日） |
| 10 | 死者祈念ミサ | 11月 6日（日） |
| 11 | 七五三 | 11月13日（日） |
| 12 | 王であるキリスト・馬小屋づくり | 11月20日（日） |
| 13 | ピザパーティー | 11月20日（日） |
| 14 | 待降節黙想会 | 11月27日（日） |
| 15 | クリスマス | 12月24日（土）～25日（日） |

2. 今月までの活動と気付き・反省点等

- *敬老の日：お祝いのカードの文字を少し大きくした方がよかった。
- *典礼研修会：概ね良好だった。参加は100名弱だった。
- *バザー：ポスター掲示は14軒に。テント6張りを購入した。

3. 各委員会から

- *典礼：クリスマスミサのスケジュール案を提示
- *信仰養成：11/27に待降節黙想会開催（指導司祭は清永神父様）
来年度四旬節黙想会は3/20に予定。指導司祭は谷津神父様
- *財務：特になし
- *當繕：特になし
- *広報：おとずれ次号は王たるキリスト号（11月20日発行予定）
- *受付：特になし

4. その他

- *信徒の集い
eメールによる連絡網導入の方針説明。
- *（玉川通宣教協力体）聖体奉仕者研修：1/22, 29（三軒茶屋）、2/5（瀬田）、2/12（渋谷）

次回教会委員会は11月13日（日）12：15～
次回活動G合同会議は12月18日（日）12：15～

以上

2016年11月度 教会委員会

日時：2016年11月13日（日）12：15～13：30

出席：湯沢神父、教会委員（小野、鈴木三、小林、金原、茂木）、典礼（安永芳）、
信仰養成（鈴木三）、受付（木村、津田）、営繕（安永三）、広報（大坪）、財務（北村）

1. 2016年10月～2016年12月の行事（予定）

| | | | |
|----|-----------------|------------------|--------------|
| 1 | 教区こどものミサ | 10月 9日（日） | 14:30-@カテドラル |
| 2 | バザー会議③ | 10月 9日（日） | |
| 3 | バザー | 10月23日（日） | |
| 4 | 大掃除 | 10月30日（日） | |
| 5 | 死者折念ミサ | 11月 6日（日） | |
| 6 | 七五三 | 11月13日（日） | 10名が出席 |
| 7 | 王であるキリスト・馬小屋づくり | 11月20日（日） | |
| 8 | バザパーティー | 11月20日（日） | |
| 9 | 待降節黙想会 | 11月27日（日） | |
| 10 | クリスマス | 12月24日（土）～25日（日） | |

2. 今月までの活動と気付き・反省点等

- * 敬老の日 あまり華美にならないようにしたほうが良いのではないかな。
- * 大掃除 お手伝いの方が多く早く終了した。
- * バザー 前日の厨房での準備はスムーズだった。
当日の入出は多かったように感じた。
授乳・おむつ替え用の部屋を用意したのはよかった。来年以降、案内を強化。
古着等の残りは寄付をする。

3. 各委員会から

- * 典礼：クリスマス行事・年末年始のミサ時間についての報告。
- * 信仰養成：聖書に親しむ会の第2週を開催。
旧約聖書を読む「マカバイ記 I」を1月から開始する。
- * 財務：バザー収益金の分配について。
- * 営繕：工事経過および今後の見通しについて。
- * 広報：おとずれ次号は11/20発行。今年はあとクリスマス号の発行で終了。
- * 受付：成人式の案内を発送する。
四旬節の案内を1月中に発送する予定。

4. その他

- * 信徒の集い
eメールによる連絡網導入の方針説明。

次回教会委員会は12月11日（日）12：15～
次回活動G合同会議は12月18日（日）12：15～

以上

こよみ

11 月

- 11月27日(日) 待降節第1主日
待降節黙想会(ミサは8:00からと9:30からの2回)
- 11月30日(水) 聖アンデレ使徒

12 月

- 12月 4日(日) 待降節第2主日
- 12月 8日(木) 無原罪の聖マリア
- 12月11日(日) 待降節第3主日
- 12月12日(月) グアダルペの聖母マリア
- 12月18日(日) 待降節第4主日
- 12月24日(土) **クリスマス**
- 午後 6時30分日曜学校「聖劇」
- 午後 7時 子どもと家族のミサ
- 午後 9時 夜半のミサ
- 午後11時 青年と共にささげる深夜ミサ
- 12月25日(日)午前8時30分主の降誕(早朝のミサ)
午前10時30分主の降誕(日中のミサ)
- 12月31日(土) 午後6時30分年末感謝ミサ

1 月

- 1月 1日(日)午前0時世界平和のミサ
午前8時30分・午前10時30分神の母聖マリア・世界平和の日ミサ
- 1月 8日(日) 公現の日 10時30分のミサ新成人祝別・ミサ後新年茶話会
- 1月15日(日) 年間第2主日
- 1月29日(日) 新年餅つき

あとがき

◇「主のご降誕」おめでとうございます。クリスマス号のためオールカラープリントでお届けします。

◇今号の「おとずれ」の湯澤神父様の巻頭言は、『しるし』と題してクリスマスを迎える私たちに、丁寧な記事をいただきました。

◇11月28日(日)の待降節黙想会で清永俊一神父様は、「神に向かう私 私とは何者か?」と題しお話でしたが、詳しい記事を掲載しています。

◇去る、10月末から10日間「聖地イスラエル巡礼」は小西神父様・井上神父様による素晴らしい旅でしたが、小西神父様より巡礼点描と巡礼に参加された斎藤登さんからも、イスラエル巡礼の旅 感想文を掲載しております。

今回の「おとずれ」に詳しい記事と写真を掲載しております

次回の発行は、2017年2月5日発行です。原稿締切は1月29日です。



『おとずれ』第61巻 第8号 2016(平成28年)12月25日発行

発行 カトリック三軒茶屋教会

編集・印刷 カトリック三軒茶屋教会・広報委員会

主任司祭：ミカエル 湯澤 民夫

〒154-0024 世田谷区三軒茶屋2-51-32

TEL 3421-1605 FAX 3421-9788

<http://home.f05.itscom.net/sancha/index.htm>

sancha-catholic0629@leaf.ocn.ne.jp